坂田寺池 SG100 出土の瓦

－坂田寺第１次

１　はじめに

現在、考古第三研究室では飛鳥地域出土瓦の再整理を進めている。今回、坂田寺池SG100出土の軒瓦等の再整理をおこなったので、その概要を報告する。

明日香村阪田に所在する坂田寺は、これまでの調査により奈良時代後半の伽藍が確認されているが、出土瓦から創建は飛鳥時代初期に遡ると推定されている。1972年におこなわれた国営飛鳥歴史公園祝戸地区整備のための進入路建設にともなう発掘調査では、池SG100内堆積土から大量の土器、瓦、木製品等が出土したことが報告されている（『藤原概報３』。以下、『概報』とする）。

『概報』によれば、SG100は７世紀前半（第Ⅰ期）に該当し、南北幅10ｍ以上、東西幅６ｍ以上で、中央部での深さは１ｍ以上におよび、東岸には護岸のため、高さ約１ｍの石積を築く。

西弘海はSG100出土の須恵器杯Ｇ・杯Ｈの年代観について、「坂田寺跡の池SG100において、この型式の杯Ｇ・杯Ｈと伴出した坂田寺創建時の屋瓦の型式、あるいは池SG100の堆積土を覆う包含層から出土した軒瓦の型式から、ほぼ七世紀の第２四半期にあたるものと推定されている」としており、『概報』記載の「SG100内堆積土」のほかに「SG100の堆積土を覆う包含層」が区別されていたことがうかがえる[1)]。ただし、西のいう「SG100の堆積土を覆う包含層」が遺物に注記された土層名のどれに当たるのか、あきらかではない。

近年、坂田寺SG100出土土器については、再整理がなされ、特に「黒色粘土層」、「バフン層」、「黒色土上層」から出土した土器群については、「650年代前半を遡ることはない」とし、新たな年代観が示されている[2)]。

本稿で報告する軒瓦の型式は、従来の坂田寺出土軒瓦の分類にしたがう（『藤原概報 22』、『同 23』）[3)]。なお、出土遺構名・層位名は遺物に注記されたものであるが、現在整理中のため今後変更する可能性がある。

２　出土瓦の概要

SG100出土の軒丸瓦は14点、軒平瓦は１点、そのほかに垂木先瓦１点、鴟尾４点、刻印瓦１点、熨斗瓦１点、隅切平瓦１点が出土している（図158・159）。丸・平瓦は大量に出土しているが、整理中のため代表的な特徴をもつものを取り上げた。図に掲載した瓦類の出土層位は表23のとおりである。

軒瓦は、『概報』では軒丸瓦１Ａ、５Ｄ、軒平瓦101Aが報告されているが、その他にも多くの軒瓦が出土している。

１～８は弁端が桜花形を呈す素弁十弁蓮華文軒丸瓦の１型式。１～５は１Ａ。外縁のあるもの（１～４）とないもの（５）とがある。前者のうち、３は笵端の外側に平坦面があり、瓦当径がほかよりも大きい。また、丸瓦部先端は凹面側を削るもの（２・３）と削らないもの（１）がある。６・７は１Ｃで、１Ａに比べて弁央の切り込みが深く、蓮弁が盛り上がる。６は丸瓦部先端の凹面側を削る。８は１Ｄ。１Ａに似るが、中房がやや大きい。丸瓦部が残存しており、釘穴が確認できる。また、凹面に側板連結模骨の痕跡がある。丸瓦部先端は凹面側を削る。９～11は、蓮弁が丸く、間弁がくさび形を呈す素弁蓮華文軒丸瓦の５型式である。坂田寺特有の瓦当文様で、六弁の５Ａ（９）と七弁の５Ｂ（10）、八弁の５Ｃ（11）が出土した。10・11は、丸瓦部先端の凹面側を削る。12は山田寺式の軒丸瓦７Ａである。７Aは山田寺式よりも蓮弁の盛り上がりが小さい。13・14は複弁蓮華文軒丸瓦の21型式。13は中房と蓮弁の一部が残るのみだが、21Aとみられる。本薬師寺６型式と同笵である。14も中房と蓮弁の一部が残る小片で、21B。飛鳥寺ⅩⅣ型式と同笵。飛鳥寺ⅩⅣには、ⅩⅣaと彫り直し後のⅩⅣbがあるが、14は中房の蓮子がやや大きく、ⅩⅣbと同笵とみられる。

15は手彫忍冬文軒平瓦の101Aである。101Aは瓦当厚が６㎝程度の厚いものもあるが、15の瓦当厚は4.3㎝とやや薄いタイプである。

16は垂木先瓦で、弁端が丸みを帯びた桜花形を呈する。垂木の先端を覆うため、裏面端部は外縁状に削りだして突出させている。

17～20は鴟尾である。いずれも赤褐色を呈す。17・18は鰭部で、18は両面に段をもつ。19は腹部の破片とみられる。20は脊稜付近の胴部片か。

21は熨斗瓦である。凸面に縦縄タタキをもち、平瓦を分割して熨斗瓦とする。凹面の布目は粗く、瓦の厚みが

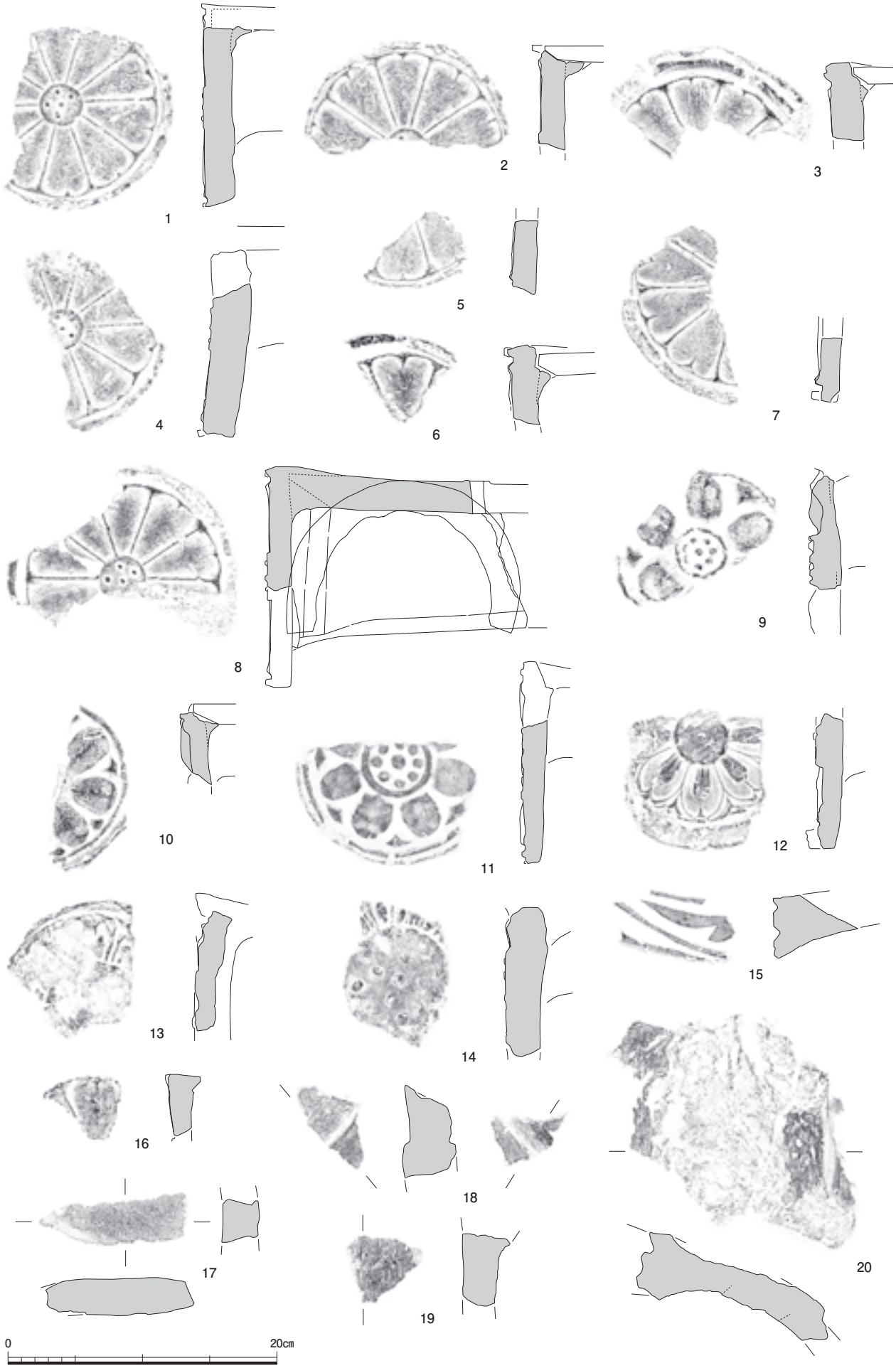

図158　SG100出土軒瓦・垂木先瓦・鴟尾　1：4

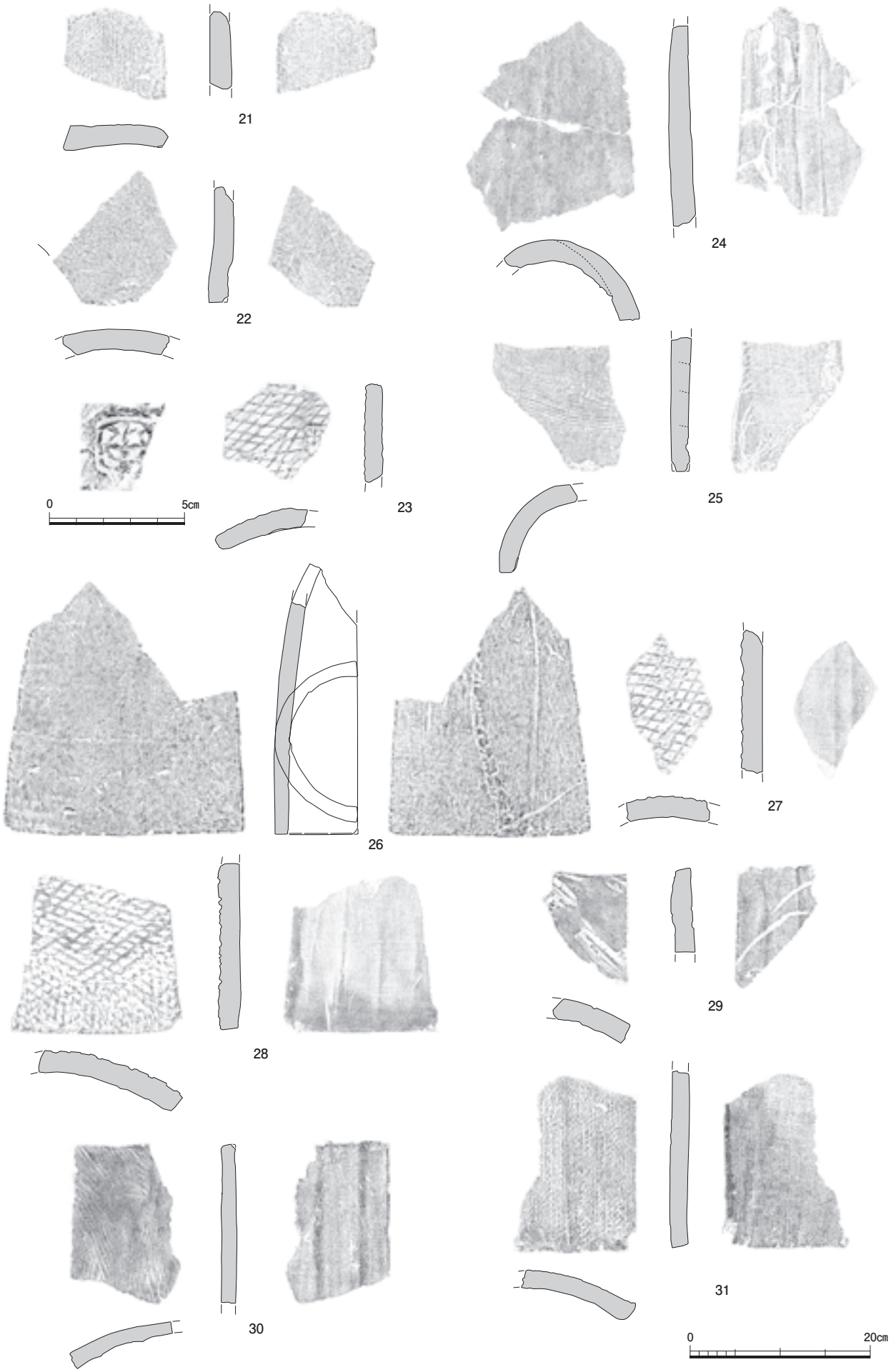

図159　SG100出土道具瓦・刻印瓦・丸瓦・平瓦　1：6（23の刻印部の拓本は1：2）

表23　SG100出土瓦類の出土層位

番号	種 類	層位名	備 考
1	軒丸瓦１Ａ	黒色粘土	『藤原概報３』掲載
2	軒丸瓦１Ａ	黒色粘土	
3	軒丸瓦１Ａ	黒色粘土	
4	軒丸瓦１Ａ	排水溝埋土	
5	軒丸瓦１Ａ	黒色粘土	
6	軒丸瓦１Ｃ	黒色粘土	
7	軒丸瓦１Ｃ	黒色粘土	
8	軒丸瓦１Ｄ	黒青灰砂質粘土	
9	軒丸瓦５Ａ	第５層青灰色粘土直下	出土日付が合わない
10	軒丸瓦５Ｂ	黒色粘土	
11	軒丸瓦５Ｄ	黒色粘土	『藤原概報３』掲載
12	軒丸瓦７Ａ	黒色粘土瓦堆積層	
13	軒丸瓦21A	黒色粘土	
14	軒丸瓦21B	黒色粘土	
15	軒平瓦101A	黒色粘土	『藤原概報３』掲載
16	垂木先瓦	黒色粘土とバフン層	
17	鴟尾	黒色粘土	SG100以外の地区と接合
18	鴟尾	黒色粘土	
19	鴟尾	黒色粘土	
20	鴟尾	黒色粘土	
21	熨斗瓦	黒色粘土	
22	隅切平瓦	黒色粘土	
23	刻印瓦	黒色粘土	
24	丸瓦	黒色土	
25	丸瓦	暗青色砂土（バフン層上）	
26	丸瓦	黒色粘土	
27	平瓦	黒色粘土	
28	平瓦	黒褐粘土	
29	平瓦	黒色土	
30	平瓦	黒色粘土	
31	平瓦	黒色粘土	

一定しない。22は隅切平瓦。広端の片側の隅を切る。凸面はナデ調整。23は刻印平瓦である。凸面の狭端寄りに刻印をもつ。凸面調整は格子タタキ。

24～31はSG100から出土した大量の丸・平瓦のうち、代表的なものを抽出して掲載した。丸・平瓦については、『概報』には全体に砂粒を含み、焼きが硬く、赤褐色を呈し、凸面に格子叩きをほどこすものが多いと報告されている。このほか、凸面に平行タタキをもつもの、そしてごく少量であるが凸面に縄タタキをもつものも認められる。

24～26は丸瓦である。24は凸面調整がナデの行基式丸瓦である。凹面には側板連結模骨痕を明瞭に残し、粘土板の合わせ目も確認できる。側縁手法は分割破面を残すａ手法である。25は、凸面に縦縄タタキをほどこしたのち、回転台を利用したカキメ調整をおこなう。凹面には、粘土紐の輪積痕跡が明瞭に残る。側縁手法は分割破面、分割裁面をいずれも残さないｃ手法である。26は、広端部分が残存する。凸面は縦縄タタキのちにナデ調整をおこなう。凹面は布の綴じ目痕が残る。粘土板づくりとみられ、側縁手法はｃ手法である。

27～31は平瓦である。27・28は凸面に格子タタキをほどこす。両者とも、凹面に布目痕と側板痕を明瞭に残す。粘土板づくりとみられる。27の側縁手法はｃ手法である。このほか、凸面格子タタキののち、タタキ目をナデ消した平瓦も多く認められる。また、格子タタキ目の形状は数種類あり、細分可能である。29・30は凸面調整が平行タタキのち、ナデ調整でタタキ目を消す。29と30とでは、平行タタキでも原体が異なっており、30のタタキ目には木目痕が浮き上がっている。両者とも凹面には布目痕と側板痕を明瞭に残し、側縁手法はａ手法である。31は凸面調整が縦縄タタキの平瓦である。凸面の側縁付近に凹型台の圧痕を残す。凹面は粗い布目痕の下に糸切痕が残る。側縁調整はｃ手法。

３　出土瓦の特徴と年代的位置づけ

以上、SG100出土の瓦類をみてきた。出土層位は、黒色粘土からの出土がもっとも多く、ほかにもバフン層や黒色土、黒褐粘土などからも出土している。

軒瓦で出土量がもっとも多いのは１型式であり、次に５型式が続く。これらは、従来から指摘されているように、未確認の７世紀前半の坂田寺の伽藍にともなう軒瓦である。このほかにも、５型式と組み合う15や桜花形の瓦当文様をもつ16も７世紀前半に位置付けられる。

丸・平瓦に関しても、格子タタキや平行タタキに加え、これらをナデ消したものが主体を占めている。これらの詳細な年代を確定することは難しいが、赤褐色の色調や胎土、側縁ａ手法が多いという特徴から、１型式や５型式にともなうものが多いとみられる。また、凹面に側板連結模骨痕が残る丸瓦は、坂田寺の丸瓦にみられる特徴であり、１Ｄ（８）の丸瓦部にも確認できることから、７世紀前半と考えることができよう。このように、SG100出土瓦のほとんどが７世紀前半に位置付けられる。

一方、SG100出土瓦の下限を知る手がかりになるものとしては、軒丸瓦７Ａ、21A、21Bがあげられる。７Ａは山田寺式の瓦当文様をもつものの、蓮弁が山田寺のものより扁平で、ともなう重弧文軒平瓦の技法変化と照らし合わせ、７世紀末に位置付けられている[4)]。また、21Aは薬師寺６型式同笵である。薬師寺６型式は本薬師

寺からはわずかに出土するのみで、詳細な年代は不明だが、天武天皇９年（680）の本薬師寺の発願より遡ることはない。加えて、21Bは天武天皇９年（680）の飛鳥寺官寺化にともなう伽藍整備に使用されたとされる飛鳥寺ⅩⅣ型式[5]と同笵である。

また、丸・平瓦に目を向けると、数は多くはないが、凸面調整が縦縄タタキのものが出土している。縦縄タタキは、藤原宮造瓦の際に本格的に導入される技法である。特に25は、凹面に粘土紐の積上げ痕跡が明瞭に残っている。また、凸面に縦縄タタキ後に、カキ目をほどこす手法は、藤原宮所用瓦窯である日高山瓦窯（橿原市）もしくは、高台・峰寺瓦窯（高市郡高取町・御所市）で生産された一群と共通する。

（清野孝之・石田由紀子・清野陽一・道上祥武）

４　出土土器群との関係

上述したように、SG100の軒瓦は、大半が黒色粘土層から出土しており、丸・平瓦も、多くが黒色粘土層出土である。また、『紀要2018』で報告したSG100出土の土器群も、同様に、大部分が黒色粘土層から出土したものである。ここでは、瓦と土器の様相から、それぞれの年代観と池埋土の堆積状況について検討してみたい。

まず、SG100の埋土の堆積状況について確認しておく。調査時の土層図によると、池内の堆積土のひとつである黒色粘土層は、東岸に築かれた石積護岸を覆って堆積している。この粘土層は西へ向かって落ち込んでいくが、調査区西端までは広がらず、調査区の中ほどで終わるようである。また、黒色粘土層出土の土器と複数個体で接合関係が確認できたバフン層は、黒色粘土層の下層にあり、池の東北部を中心に堆積している。７世紀末に位置付けられる軒丸瓦７Ａ（12）が出土した瓦堆積層は、調査区の北西辺が屈曲する部分の壁際付近で見つかっており、黒色粘土層・バフン層の上に位置する。もっとも厚いところで35cmほどあり、黒色粘土層の上に一括して廃棄されたものと考えられる。この瓦堆積は、調査区外北側へさらに続くようである。

次に、瓦と土器の年代を整理する。SG100の黒色粘土層から出土した瓦は、７世紀前半を主体としつつ、７世紀末の特徴をもつものをごく少量含んでいる。これらの瓦は、７世紀前半に建てられた瓦葺建物が廃絶した際に、池に投棄されたものとみるのが適当であろう。廃棄の年代は、７世紀末頃に比定でき、黒色粘土層の堆積の下限もその頃と考えられる。一方、SG100出土土器の実年代については、他の飛鳥地域出土の土器群との様相比較から、７世紀第３四半期に位置付けられ、もっとも新しい瓦の年代とはやや開きがみられる。

SG100の黒色粘土層ほかから出土した土器群を器種別にみると、同じ器種の個体同士では、形態的特徴や調整方法・暗文といった技法的特徴の共通性が高い。このことから、同一器種の土器は、同時期に使用されていた一群と考えてよいであろう。次に、器種間相互の関係について検討する。仮にSG100出土土器のそれぞれの器種のまとまりが、大きく時期を違えたものであるとすると、特定の器種の土器を選択して池に捨てるという廃棄行為が、異なる時期に複数回なされたことになる。しかし、このような廃棄状況は極めて不自然であり、起こりえる可能性は低いと考えられる。そのため、SG100から出土した土器群を、器種ごとに敢えて別の時期のものとする必要はなく、総体で同時期のものと捉えて問題はないと判断できる。以上のように、SG100出土の土器群は、その特徴からみると、周辺で使用されていたものが池内に一括廃棄された資料と考えるのが妥当である。

以上のような、瓦と土器の特徴から推察される廃棄状況と年代観を踏まえると、SG100の埋土である黒色粘土層は、短期間で堆積が終了したわけではなく、ある程度の期間をかけ形成されたものと考えられる。ただし、SG100の周辺には、池の埋土を掘り込んだ掘立柱列SA060などの８世紀前半に位置付けられる遺構が存在しており、出土状況については、今後さらに慎重な検討が必要である。

（若杉智宏）

註

１）西 弘海「法隆寺出土の七世紀の土器」『特別展観 法隆寺昭和資財帳調査秘宝展図録 １』法隆寺、1983（西弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社、1986再録）。

２）若杉智宏「坂田寺池SG100出土の土器群―坂田寺第１次」『紀要 2018』。

３）花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅺ』奈文研、2000。

４）花谷 浩「畿内の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ』奈文研、2005。

５）上原真人『瓦を読む』講談社、1997。